令和８年 11 月 26 日（木）No.7

途上

信州大学教育学部附属長野小学校学校だより

文責：教頭

校長講話をきっかけに、子どもたちのやる気スイッチが入り始まった「好きからはじまるワクワクのたび」。今回で４回目の全校の前での発表となりました。11 月 18 日の児童発表の様子を掲載いたします。

好きから広がる、学びの世界！（11 月 18 日　校長講話⑤）

４年１組　｜　学校の土で焼き物をつくりたい！

４月に粘土でさまざまな作品をつくっていた４年１組。「生活の中で使えるものにしたい」「ずっと形に残るものをつくりたい」。そんな思いから、陶芸への挑戦が始まりました。器の形を整える「成形」は、見た目ほど簡単ではありません。思うような形にならず、乾燥してひびが入ることもありましたが、工夫と練習を重ねてきました。

学校に陶芸用の窯があることを発見すると、今度は「どうすれば適切な温度で焼けるのだろう」と考え始めました。陶芸の専門家である西村さんや松代焼を作っている小澤さんから助言をいただき、成形・素焼き・釉薬（うわぐすり）・本焼きという工程を学びました。地域のイベントで作品を販売し、お客さんに手に取ってもらう喜びも経験しました。



専門家に教わりながら、成形に挑戦



校庭の土も焼き物づくりの材料に

さらに、学校の土を使った焼き物「長野小やき」にも挑戦しています。自分たちで掘り出した土を整え、約 800℃で焼くと、きれいなオレンジ色に。ところが、その後さらに高温で焼くと、作品が崩れてしまいました。「学校の土で、どうしたら焼き物ができるのか」。うまくいかなかった経験が、次の新しい問いにつながっています。

〈４年１組から〉　11 月 30 日（火）～12 月４日（金）には、陶芸作品の展示会をおこないます。





５年１組　｜　竹とんぼは、ただのおもちゃじゃない

５年１組の出発点は、「竹とんぼを飛ばすのが楽しい！」という気持ちでした。「どうしたらもっと高く、長い間飛ぶのだろう」「このおもしろさを、ほかの人にも伝えたい」。そんな問いを胸に、一つひとつ自分たちの手でつくり、実際に飛ばしながら改良を重ねています。

竹を割り、中心に穴をあけ、小刀ややすりで羽を薄く削ります。左右の重さがそろっていないとうまく飛びません。バランスを確かめ、羽を温めて角度を調整するなど、細かな工夫が必要です。

飛ばして比べるうちに、羽を薄く軽くすると高く飛び、丸みをもたせると横に遠く飛ぶことなどに気づきました。４枚羽の竹とんぼを試したり、羽だけが飛んでいく不思議な「UFO 竹とんぼ」に驚いたり。思いがけない結果が、「もっとやってみたい」という気持ちを生んでいます。



竹を削り、羽の形や重さを確かめる



実際に飛ばして、違いを比べる

全校集会では、つくった竹とんぼを実際に飛ばして見せてくれました。子どもたちが伝えたかったのは、単なる遊び道具としてではない、自分たちの工夫と発見が詰まった竹とんぼの学びの魅力でした。

二つの発表に共通していたこと

「すき」だから、もっと知りたい。うまくいかないから、試してみたい。見つけたことを、誰かに伝えたい。そんな思いが、調べる、工夫する、友達と話し合う、専門家に学ぶといった行動につながっていました。校長先生も、好きなことに取り組むと力が湧き、長く続けたり、さらに深めたりしたくなることを子どもたちに語りかけました。

学校では、子ども一人ひとりの「すき」や「なぜ」を大切にし、その思いが仲間とつながり、次の学びへと育つ時間を大切にしています。ご家庭でもぜひ、「今、何に夢中になっている？」とお子さんに尋ねてみてください。学ぶ意欲が好きから育まれていきます。

（令和８年 11 月 18 日校長講話）